

パーソナリティのビッグ5理論と C.Cloninger 理論における 創造的人間に基づくキャリア展開モデル

——「よりよい未来に導く相談活動」に向けて——

杉 山 崇*

A tentative model about career development process based on the Big5 theory and the Cloninger's theory of personality : For consulting to lead a person in the better future

Takashi SUGIYAMA*

【Abstract】

A consulting about career and education have aim to lead a person in the better future. Consultants need a theory to view desirable human and career development of a person. The career psychology has some theory to view that, but no theory corresponding to contemporary Japanese social situation. In this paper, the author tried to discuss a tentative model about human and career development in after the collapse Japanese convey system of livelihood security for the people. The aim of this tentative model is giving some consultants a vision about desirable human and career development process in contemporary Japanese life cycle. So the author considered desirable development to base on Big5 personality theory and Cloninger's personality theory. This model is no more than a tentative assumption and to be critically considered from now on.

キーワード：キャリア展開, Big5 理論, C.Cloninger 理論, ライフサイクル

1. 問題と目的

日本政府は 2000 年前後から国民に自律して人生（キャリア）を設計するスキルを持つことを推奨し始めた。この社会・経済的背景と政策意図は後述するが、2002 年からの厚生労働省の「キャリア・コンサルタント 5 万人計画」をきっかけとしてキャリア設計の相談に対応する専門職の育成事業が国政化した。現在では国家資格として標準レベル（キャリア・コンサルタント）、熟練レベル（2 級キャリア・コンサルティング技能士）、指導レベル（1 級キャリア・コンサルティング技能士）と専門職が体系化され、広く国民の支援業務に就いて

* 神奈川大学人間科学部（Faculty of Human Sciences, Kanarawa University）

いる。

キャリア・コンサルティングは相談者を「より良いキャリア（人生）」に導くことを目的としているので必然的に人間観（人生観）を扱う場合もある。歴史的にはその理論構築には A.Bandura（1925-）、J.Krumboltz（1928-）など多くの心理学者が関わってきた。ただ、これらは米国を背景に提案されたものが多い。現代の日本に対応した人間観を構成する試みが必要と言えらるだろう。

また、キャリア・コンサルティングは対象者を「よりよい未来」に導くことを目的としている。このことは子どもの未来に向けた相談活動である教育相談にも該当する。よって、現代社会における人生初期から後期までを見据えた人生課題を示唆する人間観があればキャリア・コンサルティングや教育相談を強力に支えてくれることだろう。

そこで本稿では近年のパーソナリティ心理学の成果である BIG5 理論と C.Clouinger の理論をもとに、キャリア展開（career development）モデルの提案を試みる。両理論とも科学の要件である実証性と論理性、再現性を兼ね備えた信頼できる理論であるので、実務を支える示唆に富むことが期待できる。

2. BIG5 理論の描く望ましい人物像とその使い方

BIG5 理論は人間がお互いの個性を 5 次元で評価していることを明らかにした理論である。よってこの理論を参考にすればどのような人物像が高く評価されるのか、すなわち望ましい人物とされるのかを描き出すことができる。研究者によって各次元の命名が異なっているが（表 1）、この理論はほぼすべての文化で該当すると考えられている。

5 つの次元の中で外向性は高ければ評価されるとは限らない。外向的な人と内向的な人はお互いに好感を持ちにくいことがあると言われている（スーザン・ケイン、2013）。そこで、他の 4 次元で好まれる人物像を考えてみよう（杉山、2016）。

調和性・協調性とは不平や不満をコントロールして人や組織に協力的に振舞えることである。誰でも自分に対して反抗的、批判的な人とは付き合いにくい。場に協力的で、自分勝手に人を責めない、人を許すことができる人物が好まれると言える。

勤勉性・誠実性は信頼できる人という意味である。裏切るような人やいい加減で約束を守れない人とはやはり付き合いにくいので、人からの信頼を大事にする人が好まれるといえる。

教養（文化）、経験への開放は興味・関心の幅が広い人、言い換えればいろんな知識や経

表 1：BIG5 理論の次元：福田（2010）を参考に作成

分類した心理学者	性格特性用語の分類（因子）と情動				
Norman（1963）	高潮性	（非）協調性	勤勉性	情緒不安定性	教養（文化）
MacCrea&Costa（1985）	外向性	（非）調和性	勤勉性	神経症傾向	経験への開放
杉山（2016）	外向性	（非）調和性	誠実性	神経症傾向	経験への開放
関連する情動	喜び	怒り・不満	—	不安・恐れ	興味・関心

験を持っていて面白い人、という着眼点である。視野が狭くて考え方が硬直化した人は付き合い合ってもつまらない。仮に実力が同じなら面白みに欠ける人物よりも引き出しの多い人物のほうがより魅力的で、尊敬もされやすい。

神経症傾向・情緒不安定性とは感情の起伏の激しさである。心配性で些細なことに怯える人、思った通りに行かないとすぐに不安定になる人は付き合いにくいので敬遠されやすいだろう。

このように 4 次元の全てで好ましい個性を兼ね備えていれば、概ねどこに行っても人物としては一定の評価をされて、適応していけると考えられる。この理論は一つの人生観・人間観としてキャリア・コンサルティングで活用できるだろう。効果的に活用できる場面としては、若年者の求職活動の支援や職場適応に悩む人の支援において、身につけたほうが良い個性について仮説を立てるという使い方が考えられる。仮説を心理教育的に相談者と共有して「成長課題」とする方法、成長に必要な啓発体験の検討、既に身につけている人の観察学習、などの支援につながるとより効果的と考えられる。

3. C.Clouinger 理論における創造的人間

この理論は個人の社会化が進む中で獲得する成熟した「大人の個性（性格）」の存在を示唆する。大人の個性は 3 次元とされているが（表 2）、表のように各次元が一つだけ突出してしまうと逆に適応が悪いことも知られている。3 次元がバランス良く獲得されることで、はじめて本当の意味での成熟した大人になれるのである（木島・伊藤・杉山、2010）。

3 次元の中でも自己超越性は 35 歳以降での獲得が重要になると考えられている。よって、本稿では 35 歳までは主に自己志向性と協調性のバランスよい獲得を成熟目標とした。

この 3 次元の個性をバランス良く兼ね備えた人物が「創造的人間」である（Clouinger, 1997）。この人物像を簡潔に表現するなら「社会的に適切な信念と、人に協力することも人を許すこともできる人間性を持ち、さらに夢とロマンも兼ね備えた人を惹き付ける人物」と表現することができるだろう。このような人物を誰もが目指す必要はないかもしれない。しかし、ここでは科学的な方法で見出された一つの目指すべき人間観として考えてみよう。

なお、C.Clouinger 理論は縦断的な個性の展開を考えることができる理論である。そこで、E.Ericson（1902-1994：エリクソン、2011）や C.Jung（1875-1961：ユング、1979）のライフサイクル論に倣って暫定的に目安となる年齢期を区切って縦断的な展開を考えてみよう。立場の変化が激しい 10 歳から 35 歳までは現代の日本の教育システムに応じて 3 年-7 年程度

表 2：C.Clouinger 理論における性格の 3 次元

性格の次元	高い人の特徴	突出した場合の欠点
自己志向性	自覚や目的意識をしっかりと持っている	独裁的・独善的
協調性	他者に協力することも人を許すこともできる	依存的で流されやすい
自己超越性	短絡的で直情的な視野から開放され、理想の未来や調和を描くことができる	非現実的で夢見がち。内向的またはエキセントリック

で、それ以外は10歳ごとに区切り、60歳程度までの展開を考えてみたい。

4. 自己志向性 vs 協調性のバランスと日本の競争社会

ところで、自己志向性と協調性はどのようなバランスで成長することが望ましいのだろうか？同時にバランス良く成長できればそれが望ましいのかもしれない。しかし、成長プロセスでは一つに集中したほうが効率よく成長できる場合もある。同時に2つ以上のことを意識することが難しい場合には、どちらかを優先せざるをえない場合もあるだろう。ここでは日本の競争社会の現状をもとに考えてみよう。

筆者は日本政府がキャリア・コンサルティングを推進する背景には数百年続いてきた「ムラ（イエ）依存的な生き方（生産力のあるムラ社会またはイエの維持に貢献することで生活が保証される生き方）の崩壊があると考えている。日本では1990年代に「国が企業を競争から護る、企業が従業員と家族の生活を護る、結果として国民の生活が護られる」といういわゆる護送船団方式に基づいた生活保障システムが崩壊した。日本人の多くは勤務先の企業（会社）に生活を保証されていることは給料（給与）が業務成果に連動した「報酬」ではなく、生活を支える「生活給」という性格を持っていることから明らかである。

実は日本における近代化とは民を養う生産力のある「ムラ」や「イエ」が「会社（企業）」にすり替わるプロセスでもあった。すなわち日本人の多くは、自己の独自性や主体性を発揮するよりも「ムラ」や「イエ」、「会社」に依存していれば生き残っていける仕組みの中で数百年来生きてきていると言える。

実際、日本では人と人との「和（協力し合う関係）」が重視される傾向が強く、親が子どもに望む特性にもこれが反映されていた。護送船団方式が崩壊する直前に行われた調査（総務省青少年対策本部・1995年公表）では日本の親が子どもに望む特性は「他人のことを思いやる心（61.9%）」「規則を守り、人に迷惑をかけない公共心（44.8%）」という他者や社会への協調に関連する項目が1位、2位で、「責任感（39.5%：3位）」「（人前で）自分の意見をはっきり言う（29.8%：5位）」などの自己志向性に関連する項目を上回っている。

しかし、グローバル社会の進展により国境が希薄化し、特にビジネス社会では世界的規模で経済的な競争が激化した。結果として企業はグローバルな競争に巻き込まれ、護送船団方式に基づいた生活保障システムは限界を迎えた。つまり国民が自律的、主体的に生活（人生）を守っていく必要性が増した。言い換えれば競争社会の一員としての自覚と主体性をより強く持つことが重要になってきているといえるだろう。

2004年・2005年に公表された資料（独立行政法人女性教育会館）では日本の親が最も望む特性は自己志向性に関連する「自分の意見をはっきり言う（69.3）」が1位と協調性に関連する「他人と協調できる（67.9%）」を僅差だが上回っている。護送船団方式崩壊からの10年でこの特性を望む親が倍増したことがわかる。

競争するには周りに流されない主体性と目的意識、すなわち自己志向性が重要になる。そのため、現代の日本の競争社会という実情を踏まえれば成長プロセスでは相対的に自己志向性を優先することが現実的だと考えられる。

5. キャリア展開モデルの構成

「3.」および「4.」の考察を踏まえて、ここからは現代の日本社会で職務、家庭、または余暇活動などの何らかのコミュニティでの所属や立場を得て自己志向性、協調性、自己超越性を兼ね備えた創造的人間に成長するキャリア展開モデルを試論として描いてみよう（図1-3および付録参照）。このモデルは筆者の教育相談、学生相談、キャリア・コンサルティング、勤労者の復職支援、精神科臨床など四半世紀の相談活動や対人援助活動で積み重なってきた人間観が反映されている。そのため完成されたものではなく、今後、さまざまな知見を集約して修正されるべきものであるが、まずは一つの試論として提案するものである。また年齢期の分け方については、人生の展開や成長の速度は個人差が大きいため暫定的なものである。相談業務で活用する場合、年齢期は個々人の進度に応じて設定し直してほしい。

6. 乳幼児童期

このモデルでは0歳から10歳までを乳幼児童期とした。15歳までの少年期と併せて、本人よりも親をはじめとした養育者、教育者の負担が高い時期と言える。

乳幼児童期は子どもの発達が相対的に脳の発達に依存する時期なので、脳の発達を阻害しない「程よい」生活環境を整えれば脳は自然に成熟へと向かっていくと考えられる。すなわち、物理的・社会的に安全な環境、愛着対象が安定的に存在する環境、年齢に近い子どもたちと触れ合う環境、自発的な探索や創造を許してもらえる周囲のゆとり、などの「普通」と

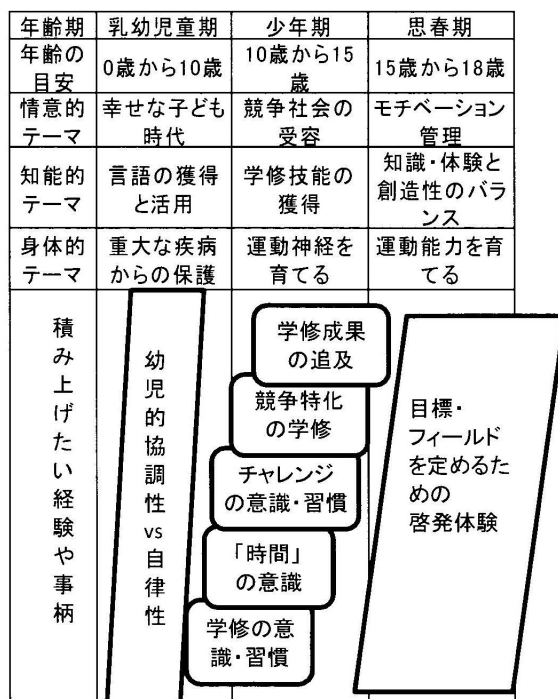


図1：乳幼児童期・少年期・思春期

される養育環境を親が維持することが重要である。E.Erikson のライフサイクル論に倣えば、この環境の中で「他の人達は敵ではなく、信頼すべき仲間なんだ」という幼児的な協調性と、「自分には何ができるのだろう、できないのだろう」という自律性を身につけることが必要である。

なお、いわゆる「知情意」の中でも「情意」は共に目的意識に関連するのでキャリア・コンサルティングや教育相談の実務者の認知的経済性を考慮して一つに集約した。「知」は「知識と技能」に関連すると考えられるので「知能（“intelligence” の訳語としての知能ではない）」と表現し、それぞれのテーマ（課題）を設定した。

上述の E.Erikson をはじめ精神分析的考察によると、乳幼児童期はこの世を生き抜くための世界観、言い換えれば「この世界は生きる価値がある世界で、自分にも生き抜く価値がある、そして自分は生き抜く力を身につけられる」、というマインドの獲得が重要である（杉山、2007）。よって、情意的テーマは「幸せな子ども時代」と言えるだろう。そして、知能的なテーマは「言語の獲得と活用」ということができるだろう。ここで言う言語は「算数」も含めている。算数は現象を数式で表す様式なので、一種の言語とも考えられるからである。身体的には疾病への脆弱性が極めて高い時期なので、「重大な疾病からの保護」がテーマになるといえるだろう。

7. 少年期－選択的注意と学修技能

少年期は早い人は中学受験で、遅い人でも高校受験で、あるいはスポーツや芸術活動で、この世は競争社会であることを実感する年齢期となる。情意的には競争社会の受容がテーマと言えるだろう。多くの子どものにとって競争社会を最初に深く実感する場は「受験」になる。受験を意識した瞬間から、周りの「友達」は「協調すべき仲間」から「受験のライバル」に変わる。受験という競争で負けない努力を積み上げなければならない。そこで図1の「積み上げたい経験や事柄」は受験を想定して描かれている。

この年代は H.Sullivan (1892-1949: サリヴァン, 1976, 1990) によるとチャムシップという親の支配が及ばない子どもだけの世界を持つ。そして、その中で「あいつのここは許せない! でも、良いところもあるから付き合っていたい」という選択的非注意という社会的技能も獲得するとされている。また十分なチャムシップの体験が適応的な人格発達に必要なとも言われている。

H.Sullivan の発想は協調性の基礎を獲得するプロセスとして非常に重要であると思われる。しかしその一方で、近年は「大人に隠された独自のルール」の中で凄惨な事件が発生することもある。また、「大人（表社会）のルール」になじまず「裏社会の大人」へと成長してしまう子どもたちもいる。チャムシップも重要だが同時に「大人（表）の世界」への入り方も学ばなければならないと言えるだろう。

現代の日本の実態としては、受験、スポーツ、芸術という競争の勝者（または競争の中で努力を重ねたもの）が人生の選択肢（大人の世界への入り口）を比較的多く得やすい。よって、知能的には学修（learning: 知識・技能を学んで身につけること）技能の獲得がテーマ

と言えるだろう。

学修技能の獲得は単に「長時間の努力をする」だけでは身につかない。認知心理学のエキスパート研究（伊藤，2007）によると、技能獲得には約 10000 時間の経験、経験を「ルール」と「教訓」に還元する、という 2 ステップが最低でも必要である。つまり、勉強をしながら「勉強はするものだ」「やらなければ成績は伸びない」「自分の場合はこの学修方法が向いている」というルールと教訓を獲得する必要がある（勉強の意識・習慣）。さらに「時間は有限なので効率良く使わなければ（「時間」の意識）」「難しいこと、できないことに取り組むのは“チャレンジ（成長チャンス）”である（チャレンジの意識・習慣）」といったルールや教訓も獲得することが必要である。さらに、ここまで獲得したルール・教訓（意識・習慣）を土台にして、目標に特化した学修とその成果（成績の向上→合格）を追求することになる。すなわち競争を通して自己志向性の萌芽を獲得するのがこの時期である。

8. 少年期の補足一知識・技能の習得による自己愛の光と影

少年期は学修技能の獲得によって多くの知識や技能を習得できるようになるので、急激に「物知り」や「達人」になれる場合もある。その中で偉くなったような錯覚に陥りやすい人もいる。特に「他の人が知らない（＝誰にも犯されない）知識」や「誰もマネしない技能」は他者との比較で敗北感を覚えにくいので「物知り錯覚・達人錯覚（一種の誇大自己）」を加速しやすい。この錯覚は強力にナルシズムとしての自己愛を満たすと考えられる。この自己愛的な心地よさは、一種の強化子となって知識・技能の習得へのモチベーションを支えているだろう。

しかし、そこに社会的比較が加わると人を馬鹿にして見下す自己愛パーソナリティ的な心性にも陥るリスクが増すと予想できる。この心性が慢性化すると独断的な自己志向性が形成されて協調性の獲得が難しくなるかもしれない。

少年時代までに安定した自尊心が育っていない場合は「物知り錯覚」や「達人錯覚」に浸ることで自尊心の不全に伴う低効力感や不安と言った情緒的混乱が軽減することがある。この体験は負の強化のメカニズム（杉山，2014）で「救い」とも思える体験になるだろう。

負の強化は慢性的な依存を形成しやすいので、依存を利用した特定のビジネスモデルや団体、特異的な個人の価値観や判断に引きずられやすくなる。こうなると自己志向性の獲得が困難になる。また、非常に偏った協調性を身に着けることになり、その後の適応的な協調性が育ちににくくなる可能性もある。

「物知り錯覚」「達人錯覚」とともに自尊心の安定や実際に役立つ知識や技能の獲得のモチベーション維持には必要な場合もある。しかし、自己愛的な心地よさや負の強化による救いへの依存が慢性化すると好ましくないとと言えるだろう。大人は心地よさや救いを脅かして追い詰めないように少年（少女）の依存を見守りつつ、時に依存の行き過ぎに警鐘を与えることも必要だと考えられる。

9. 思春期

思春期は自分が生きる世界、自分自身、そして人間なるものに失望する時期だと考えられる。この世にも人にも美しいところと醜いところがある。知性と感性が成長することによって、世界と人の醜さが見えてきてしまう。自分自身の限界も見えてくる。その中で失望を経験する人が多いだろう。

この失望が強すぎると、あらゆることへのモチベーションを失うことになる。失望を呪いに変えてモチベーションにする場合もあるが、このモチベーションは破滅的なものであることが多い。自分自身を減らすこともある。筆者の相談活動では「美しさも醜さも現実である」という事実を受容して、その中で「自分にできること（必ずしも評価される結果に結びつかなくても）」を探る、というプロセスでモチベーションを維持することを勧める場合もある。

受容のプロセスでは乳幼児童期から少年期にかけて「世界と人の代表」として存在していた親や教師が「世界と人の汚さの代表」になる場合がある。その結果として親や教師に反発することもある。これが反抗期である。反抗期は正常な発達プロセスなのだが、親や教師が反抗へのリアクションとして大人の力を誇示すると、追い詰められて反抗を強めることになる。この状態が続くと「表の世界への反抗」を軸とした自己形成が進む。身近な大人は仮に反発の対象が自分になっても見守る態度を貫くことが重要である。

しかし、身近な大人への反発は「今まで出会ったことがない大人」への関心につながり、多くのロールモデルに触れる啓発体験への原動力となる場合もある。その中で尊敬できる成熟した大人にも出会えるかもしれない。また、自己志向性に酔いしれて他者を見下す大人、やや不適切な信念を持つ大人、場渡り的で信念のない大人、協調の対象が狭い大人、不寛容な大人、など様々な大人がこの世界を構成していることを知ることもできるだろう。この啓発体験は自分が進むべき目標やフィールドを見つける、言い換えれば次の自分自身を創造するための手がかりになると考えられる。

これらのことからこの年代の情意的テーマは失望に際してのモチベーションの管理（維持）、知能的テーマは知識や啓発体験を統合した創造性のバランスとすることができるだろう。身体的には筋力が発展する時期でもあるので、総合的な運動能力を育てる時期でもあると言えるだろう。なお、筆者の臨床経験の範囲では少年期と思春期は同時並行で進む人もいれば、先に思春期を経験して少年期の課題に入る人もいるように思われる。相談実務の中では柔軟に「今必要な体験や大人による支援」を考える必要があるだろう。

10. 青年期から若年期－フィールドを定め、立場を得る時期

現代の日本では18歳以上のキャリア展開の進度は個人差が大きいですが、ここでは18歳から25歳を青年期、25歳から30歳を若年期としている。青年期は情意的には「自分が生きるフィールドを定めること」、知能的には「そのフィールドに特異な知識や技能を身につけること」を課題とした。18歳は大学進学または就職という転機を迎える人が多いが、大学であ

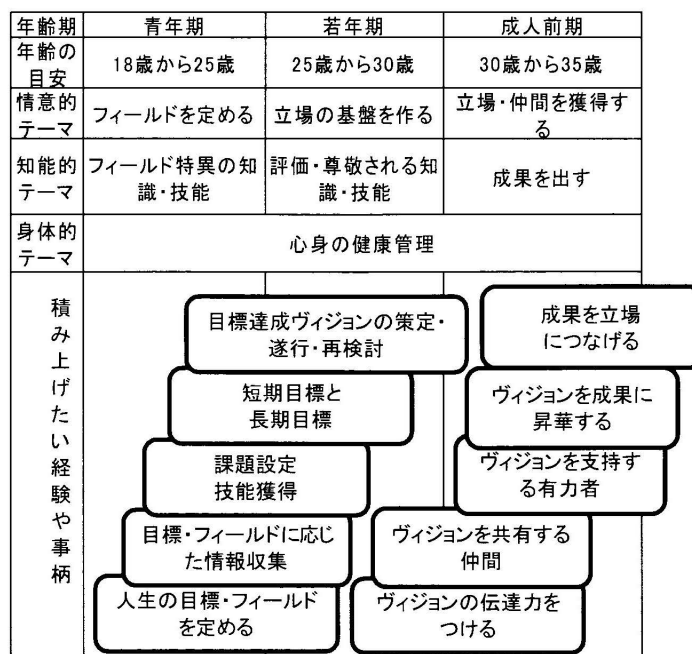


図2：青年期・若年期・成人前期

れば専攻，就職であれば職業というフィールドを定めることが求められる。フィールドを定める指標は，人生の目標が該当することが多い。何を目標にするかは良いロールモデルを参考にしつつ，キャリアアンカーやホルランドの六角形など自分に合った目標設定を支援するキャリア理論も多いので（渡辺，2007），これらの活用も有効だと考えられる。ただ，18歳で明確に定まる人は少なく，多くは20代から30代にかけてのさらなる啓発体験，進路変更や就転職を通して定めていくことが多いと思われる。なお，これ以降35歳くらいまでは身体的には健康管理がテーマとなる。

目標やフィールドが定まった後は情報収集へと進む。日本の大学生であれば就活に向けての業界研究・企業研究がここに該当するだろう。その中で具体的な課題を設定し（採用面接で「自社で何がしたいのか？」と問われることもある），達成に必要な知識や技能を獲得する段階に進む（同じく「その課題に向けて，どんな知識や技術を身に着けましたか？」と問われることもある）。

その後，1年から2，3年程度で達成できる短期目標，その積み重ねとしての20年後，30年後の最終的な長期目標を持つと適切な自己志向性の獲得が進むと考えられる。ここではキャリア・レインボー（渡辺，2007）を参考に役割ごとに適切な目標の設定が出来れば望ましい。達成までのビジョンを策定して遂行することが必要である。ビジョンは達成の進行度に応じて柔軟に再検討できると成果にも恵まれやすいだろう。ここでも良いロールモデルを参考にすると成果につながりやすい。学生時代にここまで完了していればなお望ましいと言えるだろう。

ここまでの知識や技能の獲得や青年期なりの成果を評価されると上の世代から期待され

て、また同世代からも尊敬されて立場を得やすくなる。すなわち「目的と自覚、ビジョンを持って遂行すれば評価や立場と言う社会的な結果がついてくる」という経験の積み重ねで適切な自己志向性が獲得されると考えられる。

11. 成人前期—成果と立場を得る時期

ここでは30歳から35歳を成人前期、「立場を獲得して、社会的に評価される成果を出す時期」としている。これまでの成果に応じて周囲からの評価が固まり、そのフィールドにおける立場や地位が決まってくる時期がこの年代期である。成果を早く出せた場合は若年期のうちからこの課題に入る場合もある。

この時期は個人の努力の限界を悟る。同時に立場にはコネクションやネットワーク、時には権限も付いて来る。立場を活かして他者とビジョンを共有できれば、より大きなことを成し遂げられる。そのためには自分のビジョンを人に伝える伝達力、共有できる人物を探し仲間になる力、ビジョンを支持・支援してくれる有力者を獲得する力、そしてビジョンを成果につなげる力を順次発揮する必要がある。

ビジョンは人に夢とロマンを感じさせる魅力的なビジョンであることが重要である。魅力的でなければ人はついてこない。つまりこの時期からは自己超越性、すなわち自分のためではなく人々のために思い、誰もが憧れるような素敵な近未来のビジョンとその実現プロセスを描けることが必要である。これは事業や仕事だけでなく、家族経営、趣味や余暇活動、地域活動、など全般に言えることである。そして、最終的にはビジョンが形になり、その成果が立場につながる事が理想と言えるだろう。

医師や弁護士などのいわゆる士（師）業は練度や経験値が重要なので、この時期は比較的遅く訪れるようである。逆にスポーツ選手は選手生命が短いので若年期にはこのテーマに突入することも多い。また、スポーツ選手の場合はリタイア後のセカンドキャリアで何らかの団体に関わる場合には、そのタイミングでこのテーマに突入することもあると考えられる。なお、スポーツ選手がセカンドキャリアで別のフィールドを選んだ場合は青年期の課題から始める場合もある。

12. 成人後期—立場を活かせる時期

ここでは40歳以降を立場の向上と成果の更新がテーマとなる成人期後期とした。ただし、フィールドによっては成果を上げて立場が得られない場合もある。また、立場の維持だけでも非常に難しいフィールドもある。立場に忙殺されて成果の更新がままならない場合もある。E.Eriksonのライフサイクルによると停滞性に悩み始める時期であり、C.Jungに基づいた河合（1996）の考察によると身体的にも社会的にも能力的にも限界にぶち当たる「中年期クライシス」に苦悩する時期でもある。よって、ここから先はそれぞれの状況に応じて目標設定をする必要があるが、ここでは立場を得られた人、立場を活かせる余裕のある人が停滞性や中年期の危機に苦悩しにくくなる生き方を想定した。なお、身体は加齢による劣化の受

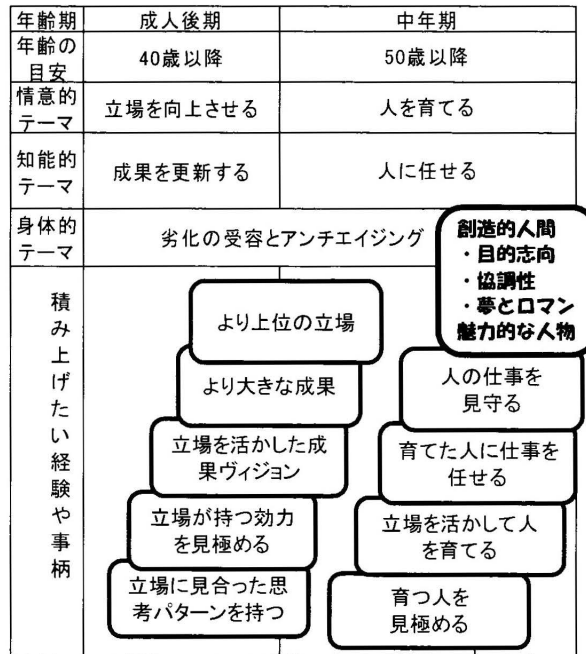


図3：成人後期・中年期

容と加齢への抵抗（アンチエイジング）がテーマとなる。

筆者なりに生き活きしている 40 歳以降の事例を観察した結果に過ぎないが、立場を活用したより大きな成果を目指すことが一つの苦悩の回避策になるように思われる。ここでまず重要なことは、協調性や自己超越性をはじめとした立場に応じた思考パターンであると考えられる。自己志向性に基づいて立場を自分のために活用するだけの人は多くの場合で立場を追われる。立場とそれに伴う効力は人のために使うべきものである。優位な立場を得たからこそ、一層の協調性と自己超越性をもって「自分が何をすればみんながよりハッピーになれるのか」を想像する必要があると言えるだろう。

次に立場がもたらす効力とその限界を自覚し、その効力を活かして「何ができるか」というビジョンを持ち実現する、という目標にトライすることである。成果が出なければ立場を失うリスクがある場合は慎重にならざるを得ないが、正しい自己超越性に基づいてビジョンを描き多くの人が喜ぶ成果を出せば、それはより上位の立場につながると考えられる。これが可能になるのは状況や運、タイミングなど多くの条件が必要だが、目指す価値がある生き方だと思われる。

13. 中年期一人を育て、人に任せる時期

ここでは 50 歳以降を中年期としている。もちろん個人差も大きいが現代では 90 歳を超える高齢者も少なくなく、就労年齢も 60 代後半から 70 代、条件に恵まれれば 80 代近くまで伸びている。すなわちライフスパンが拡張しているの、50 歳前後は職業人生における折

り返し地点に該当することが増えるだろう。そこで50歳以降を中年期とした。

成人期までは成果を追及する時期だが、年齢に応じて認知的な硬さが増す（佐藤，2013）。時代や状況の変化への柔軟な対応は徐々に難しくなり、成果が出なくなる時がだれにでもやってくるだろう。人によっては40代でこの時期が来るかもしれない。

E.Erikson は停滞性に悩むのではなく、自分の経験を若い人に活かしてもらおうという社会的な生殖性に注目して生きがいを得ることを勧めている。すなわち人を育てるという生き方である。そのためには、育つ人（または育てられる人）を見極め、立場や人脈を活かして人を育て、育てた人に仕事を任せ、その仕事を見守るというプロセスが必要になるだろう。すなわち次世代に夢やロマンを見出して、未来を託せるという形で自己超越性が発揮されることが必要である。

14. 結び

現代の日本を想定して、パーソナリティ心理学の近年の成果である BIG5 理論と C.Cloninger 理論に基づいて中年期までのキャリア展開の人間観を描いた。参考にした理論は論理性も実証性も備えた確固たるものだが、本稿は筆者の経験に基づく試論であるので、今後は批判的に検討されるべきものである。だが現代社会に応じたキャリアを縦断的に見据えるモデルがなければ、「未来に導く」相談活動は難しい。本稿で提案した理論がより適切で体系的なモデルへの議論のきっかけになれば幸いである。

良いコンサルティング（相談業務）にはコンサルタントが相談者も気づいていない課題に気づくことが重要である。本稿のキャリア展開モデルはその気づきを支援するためのものである。相談者がまだ自分自身の課題やキャリア展開上の立ち位置に気づいていない場合は気づいたことがらの使い方に注意が必要である。気づけない時は気づけない理由が必ずある。それは単に知識と経験不足だけによる場合もあれば、何らかの感情的な問題や状況的な問題という場合もある。相談者を追い詰めるようなコンサルティングは避けるように心がけたい。筆者は付録のシートを提示して「あなたは今どの辺にいますか？」と自己診断を促しつつ話し合うこともあるが、このモデルを押しつけるようなことがないように配慮している。

ところで心理学は人の心と行動の法則を見出す科学である。そのため心理学者は「これは良い、これは良くない」といった主観や価値観を極力廃して客観的に人を観察するトレーニングを受けている。このような態度がいわゆる心理学研究法の原点である。この姿勢に基づいて、心理学研究者は「主観が混入して間違っている可能性がない資料とその解釈」を提示することを好む。すなわち「間違っている可能性のある理論（人間観）」の提案には消極的と言われている（月元，2013）。しかし、未来は結果論としてしか知るすべはなく、「未来に導くための相談活動」は必然的に間違っているかもしれない可能性を含みながら進ませざるを得ない。本稿は「間違っている可能性のある試論や仮説」の提案なので、心理学研究者としては複雑な思いを禁じ得ない。しかし、相談実務者として実務を支える理論にたどり着くためには本稿のような試論や仮説も時に必要なことかもしれない。

【文献】

- Clouinger, C. (1997) : 人格と精神病理の精神生物学的モデル : 臨床使用のための基本的な知見, 心身医学 37 (2), 91-102.
- エリクソン E.H. (著), 西平直 (翻訳), 中島由恵 (翻訳) (2011) アイデンティティとライフサイクル, 誠信書房.
- 福田由紀 (2010) 心理学要論, 培風館.
- 伊藤絵美 (2007) 基礎学としての認知心理学, 杉山崇・前田泰宏・坂本真士 (編) これからの心理臨床, ナカニシヤ出版.
- ユング, C.G. (著) 鎌田輝男 (訳) (1979) 総特集 ユング 人生の転換期, 『現代思想』, 7 (5), 42-55.
- 河合隼雄 (1996) 中年クライシス, 朝日新聞社.
- 木島伸彦・伊藤絵美・杉山崇・津川律子 (2010) パーソナリティ心理学を活かす, 坂本真士・杉山崇・伊藤絵美 (編) 臨床に活かす基礎心理学, 東京大学出版会.
- 佐藤眞一 (2013) 老年心理学からのアプローチによる認知症研究の基礎と応用, 発達心理学研究, 24 (4) 495-503.
- サリヴァン, H.S (著) 中井久夫・山口隆 (訳) (1976) 現代精神医学の概念, みすず書房.
- サリヴァン, H.S (著) 中井久夫 (訳) (1990) 精神医学は対人関係論である, みすず書房.
- スーザン・ケイン (著) 古草秀子 (翻訳) (2013) 内向型人間の時代 社会を変える静かな人の力, 講談社.
- 杉山崇 (2007) こころを病む時代, 徳永哲也・亀口公一・杉山崇・竹村洋介・馬嶋裕 (著) 福祉と人間の考え方, ナカニシヤ出版.
- 杉山崇 (2014) 臨床心理学における自己, 心理学評論 57 (3) 434-448.
- 杉山崇 (2016) 性格は 5 次元でできていた!, 越智啓太 (編) ビジュアル心理学百科, 創元社.
- 月元敬 (2013) ふと浮かぶ記憶・思考の計算論モデル, 関口貴裕・森田泰介・雨宮有里 (編) ふと浮かぶ記憶と思考の心理学, 北大路書房.
- 渡辺三枝子 (2007) 新版 キャリアの心理学——キャリア支援への発達のアプローチ, ナカニシヤ出版.

付録

年齢期	乳幼児童期	少年期	思春期	青年期	若年期	成人前期	成人後期	中年期	
年齢の目安	0歳から10歳	10歳から15歳	15歳から18歳	18歳から25歳	25歳から30歳	30歳から35歳	40歳以降	50歳以降	
情意的テーマ	幸せな子ども時代	競争社会の受容	モチベーション管理	フィールドを定める	立場の基盤を作る	立場・仲間を獲得する	立場を向上させる	人を育てる	
知能的テーマ	言語の獲得と活用	学修技能の獲得	知識・体験と創造性のバランス	フィールド特異の知識・技能	評価・尊敬される知識・技能	成果を出す	成果を更新する	人に任せる	
身体的テーマ	重大な疾病からの保護	運動神経を育てる	運動能力を育てる	心身の健康管理			劣化の受容とアンチエイジング		
積み上げたい経験や事柄	幼児的協調性 vs 自律性 学修成果の追及 競争特化の学修 チャレンジの意識・習慣 「時間」の意識 学修の意識・習慣	学修成果の追及 競争特化の学修 チャレンジの意識・習慣 「時間」の意識 学修の意識・習慣	目標・フィールドを定めるための啓発体験 目標達成ビジョンの策定・遂行・再検討 短期目標と長期目標 課題設定技能獲得 目標・フィールドに応じた情報収集 人生の目標・フィールドを定める	目標達成ビジョンの策定・遂行・再検討 短期目標と長期目標 課題設定技能獲得 目標・フィールドに応じた情報収集 人生の目標・フィールドを定める	成果を立場につなげる ビジョンを成果に昇華する ビジョンを支持する有力者 ビジョンを共有する仲間 ビジョンの伝達力をつける	成果を立場につなげる ビジョンを成果に昇華する ビジョンを支持する有力者 ビジョンを共有する仲間 ビジョンの伝達力をつける	より上位の立場 より大きな成果 立場を活かした成果ビジョン 立場が持つ効力を見極める 立場に見合った思考パターン	人の仕事を見守る 育てた人に仕事を任せ 立場を活かして人を育 育つ人を見極める	創造的人間 ・目的志向 ・協調性 ・夢とロマン 魅力的な人物

試論：創造的人間へのキャリア展開マップ